ユーラシアンホットライン

半眼瞑目。笑顔で帰天。加藤九祚先生ありがとうございました。

NPO ユーラシアンクラブ名誉会長である加藤九祚先生は、2016 年 9 月 11 日、ウズベキスタンのテルメズで、仏教遺跡の発掘中に倒れ、病院で亡くなった。「点滴はいらない。水が欲しい」と話し、半眼瞑目、笑顔で帰天された。加藤九祚先生ありがとうございました。後背を拝し 40 年。人類史の奥行にご案内いただいたことを感謝します。今後も九さんに寄り添い、人生を全うします。また一杯やりましょう。

11 月 3 日午後 2 時から、JICA ちきゅう広場国際会議場には、加藤九祚先生を慕う 400 人近い人が足を運び、先生の足跡を偲びました。偲ぶ会は、オクサス学会の前田耕作先生を中心として多くの関係者が協力して運営に当たりました。NPO ユーラシアンクラブは、私が昨年加藤九祚先生と一緒に、国立民族学博物館、新潟県立歴史博物館、横浜ユーラシア文化館で開催した「岩に刻まれた古代美術　アムール川の少数民族の聖地シカチアリャン」展の報告の為シカチアリャン村に訪問したり、私が住む愛川町での第 1 回まちづくり講座のため、偲ぶ会準備会第 1 回、第 2 回に参加できず、出遅れました。私の仲間が、偲ぶ会の看板を製作したり、当日受付に 6 人が参加し、会場設営にも協力したほか、私やユーラシアンクラブの旧知の人が多数参加してくれました。九さんも喜んでいるでしょう。

偲ぶ会の参加者は、日が近づくにつれ、数を増し、多方面にわたり、前田先生ら事務局は対応に追われました。私は、九さんの来し方を知るものとして、九さんの人生が中央アジアだけでなく「ユーラシアと日本をつないだ人」であることを知ってもらうべく努力しました。それは十分果たせたといえず、今後、ユーラシアンクラブの活動の方向として、日常の活動以外に並行して、「顕彰する活動」を続けることにしました。その計画は下記に記す通りです。江藤セデカ理事長を中心として、多くの加藤九祚支援者とともに、ウズベキスタン大使館、タジキスタン大使館、外務省等とも緊密に協力してまいります。

A．P．デレビャンコ、シカチ・アリャン村から弔電

1）Dear Ono Ryo,The letter from A.P. Derevyanko and V.I. Molodin devoted to the death of professor Kato Kyuzo sensei　is in the attachment.

偲ぶ会に参加された、尊敬する皆様！

私たちは、取り返しのつかない損失を蒙りました。傑出した学者そして素晴らしい人、友人であり仲間であった加藤九祚先生が私たちを残して逝ってしまいました。

加藤先生と私たちは深い友情で結ばれていました。私たちは緊密に協力しただけでなく、人類がその尊厳や豊かさの痕跡を記したシベリアの発掘現場で一緒に調査しました。加藤先生の活躍は私たちの見本でした。先生は亡くなるまで、好きな学問に取り組み、精力的に働き続けました。

加藤九祚先生は、ロシアの本当の友人だったことを強調しなければなりません。惨憺たる戦争と捕虜体験を経て、なお、ロシアとロシア人に対して愛と尊敬を持ち続けました。そして私たちの国の人々も同じように加藤先生を尊

敬していました。
　私たちは決して加藤九祚教授を忘れません、一緒に過ごした、友人との時間を誇りに思っています。
　心からお悔やみ申し上げます（すべての私の心をあなたに）

ロシア科学アカデミーシベリア支部考古学民族学研究所所長、ロシア科学アカデミー会員、Ａ．Ｐ．デレビャンコ副所長、ロシア科学アカデミー会員、Ｂ．Ｉ．モロージン

２）昨年国立民族学博物館、新潟県立歴史博物館、横浜ユーラシア文化館で「岩に刻まれた古代美術　アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリャン」展を開催したシカチ・アリャン村の教諭ビクトリヤさんと村長ニーナさんの追悼メッセージ

　私たち、ドンカン・ビクトリヤとドゥルジニーナ・ニーナは、加藤九祚先生と家族や友人の皆様に深い哀悼の気持ちをお伝えします。
　加藤さんは、純粋な気持ちと温かい心を持った、非常に興味深い方でした。私たちは、加藤さんがロシアの歌を歌い人生について語るのを聞くのが楽しみでした。加藤先生は乾燥や寒さ、どんな自然環境にも負けず、毎年成長し花を咲かせるアザミの花を、ユーラシアンクラブのシンボルにしました。忍耐と持続性の象徴でした。加藤先生その人でした。そう、疲れを知らず、人生を楽しみ、陽気な人のまま加藤先生は私たちの記憶に残っています。（原文は、詩のような文章でした）

　　ニーナ、ビクトリヤ。ロシア。シカチ・アリャン。

偲ぶ会で紹介されたウズベキスタン大使、タジキスタン大使のメッセージ（大野遼が代読；両大使とも偲ぶ会に出席）

１）ファルフ・イスロムジョノヴィチ・トゥルスノフ駐日ウズベキスタン特命全権大使の挨拶

尊敬する加藤定子様
尊敬する偲ぶ会の参加者の皆様

　優れた人格者、偉大な学者、社会活動家、そしてウズベク国民の大切な友人であられた加藤先生のご逝去に際し、深い哀悼の意を表します。
　加藤先生は、1963 年に初めてウズベキスタンを訪問されて以来、歴史あるウズベキスタンの大地とホスピタリティーにあふれたウズベク人を深く愛してくださいました。加藤先生は、ウズベキスタンを第二の故郷とおっしゃっていました。
　加藤先生は、ウズベキスタン科学アカデミーやその他の学術機関と密接に協力され、さまざまなプロジェクトに参加されてきました。そして、スルハンダリア州のダルベルジンテパ、カラテパ、ホルチャヤン、ファヨズテパにおいて、発掘調査をされてきました。加藤先生が熱心に打ち込まれた研究については、ウズベキスタンの歴史の教科書でも取り上げられています。
　イスラム・カリモフ初代大統領は、加藤先生の多大なる学術的貢献をたびたび讃えてこられました。2014 年 5 月にサマルカンドで開催された国際会議「中世に生きた東洋の学者、思想家の歴史的遺産と現代文明におけるその役割と意義」において、カリモフ大統領は、加藤先生は中央アジアの偉大な研究者であり、その学術的活動は中央アジアの歴史や民俗学、考古学、芸術の未知なるページを開いたと述べられました。
　2002 年には、ウズベキスタンと日本の友好関係の強化と学術交流の発展における加藤先生の多大なる貢献を讃え、先生の 80 歳のお誕生日に大統領令により、高位の国家勲章であるドゥストリク勲章（友好勲章）が授与されました。
　私たちは、加藤先生のご逝去に深い悲しみを感じておりますが、先生が半世紀以上に渡り築いてくださった学術交流と友情あふれる温かい相互理解の絆は、今後も続き、発展していくと確信しております。
　加藤先生がウズベク民族の貴重な歴史・文化遺産の研究やウズベキスタンと日本の交流の発展に果たされた絶大なる貢献は、ウズベキスタンの歴史に輝かしい記憶としてとどめられ、先生が残された研究成果は世界中の学者たちが何世代にもわたり、大きな関心を寄せ、学んでいくことでしょう。
　加藤先生の記憶は、永遠に私たちの心に残っていくでしょう。

2) ハムロホン　ザリフィ　駐日タジキスタン共和国大使館特命全権大使の挨拶

私は、かねて、中央アジアで、月氏やクシャン朝の仏教遺跡を発掘調査する加藤九祚先生を尊敬しており、お会いしたいという希望を、ＮＰＯユーラシアンクラブの大野遼会長、江藤セデカ理事長にお伝えし、タジキスタン大使館で面会した。その際、私が執筆し、世界 7 カ国で翻訳出版されている「タジクの黄金遺宝」日本語版出版の監修者をお受けいただけるようにお願いした。加藤先生は快諾され、帰国後相談することになっていた。思いもよらず、加藤先生は中央アジアのテルメズで亡くなった。大変悲しく、弔意を表するため本日の偲ぶ会に参加した。私は今でも、「タジクの黄金遺宝」日本語版の出版を加藤先生にお願いしたいという希望を持っており、加藤先生が名誉会長を務めるユーラシアンクラブが引き継ぎ、発行されることになった。私は、これに全面的に協力し、また加藤九祚先生の記念碑建立では、最高品質のパミールの大理石を提供することをお約束したい。加藤九祚先生は、中央アジアと日本をつなぐシルクロードを象徴する架け橋であると思う。

私は今後、名誉会長である加藤九祚先生を顕彰するため、これまで一緒に加藤先生を支援してきた皆様とともに、加藤先生の活動の意義を後世に継承する顕彰活動を組み立てて行く考えです。

加藤先生の顕彰をしたい　―　*呼びかけ人・賛同者・協力者を募ります*

90 歳を過ぎてなお、加藤先生が中央アジアのウズベキスタン・テルメズで仏教遺跡発掘をはじめ調査研究・著述・国や民族を超えた交流に情熱を注いでおいでになりました。

この度テルメズの発掘現場入りされたときにも、先生のお心には、具体的にいくつかの「次なる取り組み」が描かれていたことも、先生と親交のあった人々のよく知るところです。

加藤先生は、26 年にわたって情熱を注がれた中央アジアの地で、思いもかけず帰天されましたが、先生の薫陶を受けた私たちそれぞれが、各分野においてそのお志を継ぎ、ユーラシアの理解・親睦・協力促進等で力を尽くすことが、先生へのささやかなご恩返しになるものと考えます。

ユーラシアンクラブは創設以来、加藤先生を名誉会長にいただき、親交にあずかってきました。私たちは先生を失った悲しみにまっすぐに向き合いながら、しかし、先生の偉大な歩みを受け継ぎ、顕彰していかなければならないと考えます。その一環として次のような展望をもっています。

1)　加藤先生が、タジキスタンの駐日特命全権大使からの監修依頼を引き受けた、**『タジクの黄金遺宝』日本語版発刊**を実現させる
2）「こころはいつも旅する」という言葉を残して先生が旅立ったテルメズ初め中央アジア、アルタイ山脈の記念すべき業績の地に**「加藤九祚記念碑」**を建てる
3）シベリア、アルタイ、極東ロシア、中央アジアなどユーラシアと日本をつないだ偉大な先駆者の業績を継承・発展させる拠点として、**「加藤九祚記念館」**設立を働き掛ける

1）『タジクの黄金遺宝』日本語版の発刊　（ハムロホン　ザリフィ特命全権大使著）

大使からの熱心な依頼を受け、先生が「やりましょう」とおっしゃったことです。

（ユーラシアンクラブ会長・理事長がその場に同席）

日本の基層文化形成に大きな影響を与えたスキタイ、ソグド、クシャンなどシルクロード理解促進に役立つ、日本初の民族文化遺産の詳細な内容（Ａ４判 400 頁余り、総カラー豪華本）

＊　既に 7 か国で翻訳出版されている（フランス、ドイツ、トルコ、アラブ首長国連邦、中国ほか）

2）加藤九祚記念碑

タジキスタン共和国特命全権大使は、「加藤先生は中央アジアの宝」と称え、「記念碑のためパミールの最高級の大理石を提供する」と話しています。加藤先生は、ウズベキスタン共和国から友好勲章も贈られています。ウズベキスタン共和国の協力も得て進めたい考えです。

3）加藤九祚記念館設立

加藤先生は今回の中央アジア訪問に先立ち、親しい人に「加藤九祚記念館」設立の希望をもらしていました。
先生の業績の受継ぎ、更なる発展の拠点として、学究の徒ならびに広く人々のユーラシア理解に資することを期します。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

一ＮＰＯ法人であるユーラシアンクラブ単独で、これらができるとは考えません。

「つなぐ人」加藤先生のお心に適うよう、先生を慕う有志の方々と意見交換しながら、広く呼びかけ人、賛同者を募り、上記のような形で先生を顕彰したいと願っています。

2016 年 11 月　　ＮＰＯ法人ユーラシアンクラブ　理事長　江藤　セデカ

呼びかけ人　元ユネスコ事務総長顧問　服部　英二
中央アジア・コーカサス研究所　所　長　田中　哲二
玉川文化財研究所　所　長　戸田　哲也
早稲田大学文学部　教　授　伊東　一郎
国立アイヌ民族博物館設立準備室　主　管　佐々木史郎　（生年順）

加藤九祚先生（ユーラシアンクラブ名誉会長）と大野遼（ユーラシアンクラブ会長）との 40 年
―つなぐ人の後背を拝して―

● 1972 年、ノヴォシビルスク・アカダムゴロドクで、二人のＡ．Ｐ．オクラドニコフ、デレビャンコ氏と面会

平凡社を退社した翌年の 1972 年、ノヴォシビルスクのアカデムゴロドクにあるソ連科学アカデミーシベリア支部歴史言語哲学研究所に加藤九祚先生の姿があった。井上靖さんとシベリアを訪問してから 4 年後のことであった。「黄金のトナカイ」を翻訳した縁で、シベリア考古学の父・Ａ．Ｐ．オクラドニコフ所長が招待したのだ。ここで、当時 29 歳のＡ．Ｐ．デレビャンコ副所長と面会、多くの研究者と会い、シベリア、極東の古代史について詳しい情報を得ることができた。さらに 4 年後 1975 年には、梅棹忠夫国立民族学博物館館長の招聘によって教授として民博に赴任する。2009 年 10 月の民博インタヴューで加藤先生は「人の縁というのはすごいです。私はこれまで、人の縁に恵まれてきたと思います」と語っている。

36 年前、A.P.オクラドニコフの墓前で（大野遼撮影）

● 1976 年加藤先生との面会。アザミの歌との出会い。北方ユーラシア学会の創設。

メディアの記者として大阪社会部に所属していた時に、国立民族学博物館に加藤九祚先生が教授として任官したのを知って、1976 年、研究室に駆けつけて以来 40 年にわたり親交を得てきました。私は、50 年前に高校生の時に、先生の書かれた本を駅前の書店で手にし、「へえー、面白い人がいるな」と思ったことがあり、加藤九祚という人を覚えていました。それで 10 年後、たまたま民博に来たということを知って駆け付けた次第です。以来しばしば、研究室で 5 時から飲みはじめ、大阪ミナミのスナックに通う日々が始まり、加藤先生の持ち歌「アザミの歌」は 35 年前スナックのママから教えていただいた。チェーホフの「子犬を連れた奥さん」のロシア語版を渡され、「これを全部覚えたら」と勧められ、ロシア語になじんだり、梅棹忠夫館長を初め民博の方々の知遇を得た。40 年前私は、メディアで、日本の歴史や文化を取材する記者として活動し、日本の基層文化が南方起源論に偏っていることを正さないといけないと思うようになった。私は、日本人記者として初めて「シベリア少数民族事情」を取材し連載し、極東少数民族に関心を持った。当時筑波大学の加藤晋平教授と「日本人と文化の北方基層を探る会」を立ち上げ、加藤九祚、加藤晋平の後をついて、ノヴォシビルスクのアカデムゴロドクを訪ねるようになった。さらに、二人の加藤を中心に、私が親しくさせていただいた坪井清足・奈良国立文化財研究所所長、田中琢・埋蔵文化財センター長、松本秀雄・大阪医科大学学長、佐々木高明・民博教授、大林太良・東大名誉教授ら、のちに藤本強・東大文学部長、田村晃一・青山学院大学教授も参加し北方ユーラシア学会を創設、江上波夫・東大名誉教授が会長となった。私は事務局長となった。その後日本の北方起源論を活性化させた北方ユーラシア学会は、加藤九祚先生がいなければ創設できなかった。

● ソ連領アジアの学者の「研究紹介者」（加藤先生の自称）から考古学者へ。旧ソ連の崩壊。

その象徴がアファナシェヴォ古墳の発掘だった。1986 年、アルタイ山脈のデニソワ洞窟の発掘キャンプでデレビャンコ所長が突然「加藤先生に古墳を一つ分けてあげよう」と言った。デニソワ洞穴前のアヌイ川上流 15 キロ左岸の丘陵にあった古墳が選ばれた。発掘の結果はアンドロノヴォより古いアファナシェヴォ期の土器やオーカーに覆われた 190 センチ以上の男性人骨が出土した。それまで文献を渉猟してきた加藤九祚先生の初めての発掘となった。翌年には「アルタイ・シベリア歴史文明展」も開催され、日ソ共同調査はその後 5 年続き、1991 年夏には、日本から 100 人以上の研究者が参加し、世界が注目するアルタイ山脈のパジリク王墓の発掘が行われた。春に来日したゴルバチョフ大統領と日ソ政府間交換

公文で「パジリク王墓の発掘」が取り上げられた上での発掘だったが、パジリク王墓発掘中にクーデターが発生、ゴルバチョフは辞任、旧ソ連が崩壊した。

北方ユーラシア学会は加藤九祚先生をユーラシアと日本を結ぶつなぎ手、原動力として創設され、以後陸続と多くの研究者をシベリア・アルタイ・極東に呼び込むことになった。

● 加藤先生は仏教遺跡を発掘し、大野はシルクロードツアーで発掘現場を訪問。

私はこの年 1991 年、旧ソ連崩壊を目の当たりにして、ユーラシアンクラブ創設の準備にかかり、極東の少数民族村を視察、加藤先生は中央アジアで発掘調査を始めた。その最初が、キルギス共和国のある天山山脈のソグド人の集落とも言われるクラスナヤレーチカ仏教遺跡の発掘。その後、ウズベキスタン南部スルハンダリヤ右岸にあるダルベルジンテペ、そしてテルメズのアムダリヤ川右岸の軍事基地内にあるカラテパ遺跡である。私は数えと満の 2 回、80 歳の祝いを歌ったツアーを組んでカラテパを訪問した。また、**大乗仏教を伝播したシルクロードは音楽のシルクロード**でもあったという考えで、音楽のシルクロードツアーも 2 回（2 回目は日本ウズベク国交 20 周年記念ツアー）、加藤先生を団長に実施、カラテパ僧院中庭での即興演奏やアムダリヤを望むカラテパ遺跡の頂上でも即興演奏を行い先生は涙をぬぐっていた。テルメズの考古博物館には、友人のトゥルグーノフ先生が、友好の橋北詰アイルタム遺跡で発掘した楽人像があり、そこには日本の薩摩琵琶の起源と判断される琵琶を弾く女性の演奏姿があり、東京から参加した薩摩琵琶奏者の首藤久美子さんが像の前で記念演奏をした。最後はサマルカンド最大の観光地レギスタン広場メドレセ中庭でコンサートをおこなった。加藤先生はどこでも主役だった。

● ユーラシアと日本をつないだ人生。キーワードは「スキタイ・ソグド」

加藤九祚先生は、シベリアで人生の起死回生を図り「シベリア留学」を卒業後、日本人の知らないシベリア・極東や日本との関わりを紹介する文献学者・作家から、**アルタイ山脈で発掘に目覚めて南下、天山山脈そしてアムダリヤで仏教遺跡を発掘する人に**なり、中央アジアでも、陸続と多くの研究機関、研究者を呼び込み、たくさんの人に感動を与えてきた。加藤先生の人生は、一言でいえば、**ユーラシアと日本をつないだ**ということに尽きる。アルタイ山脈から天山山脈そしてアムダリヤをつなぐキーワードは**「スキタイ・ソグド」**であった。

国立民族学博物館に加藤九祚先生が教授として任官したのを知って研究室に駆けつけて以来 40 年にわたり親交を得てきましたが、先月 11 日、ウズベキスタン共和国のテルメズ市の病院で死去されました。詳しい死因は公開されておらず不明ですが肺炎と想像されます。3 日前に高熱で倒れ、2 日前には食事もできるようになり、点滴を勧められましたが、先生は「点滴はいらない。水が欲しい」と断ったと伝えられます。翌日午後体調を崩し、片肺の機能や内臓が具合悪くなり、亡くなったそうです。急遽日本からテルメズに入り、翌日には面会した奥様の定子さんによれば、「半眼で瞑目し、笑っているようだった」と言います。先生は常々、「死ぬ時は、ありがとうの一つも言えるといいね」と話していました。お気持ちはそのようであったと信じます。

私と先生の最後の仕事は、民博など３館で開催された「アムール河の古代美術　アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリャン」だった。加藤先生を慕い、応援してきた多くの皆様とともに、心よりご冥福を祈るとともに、今後も、九さんを身近に感じながら生き、九さんを顕彰したいと思う。

大野　遼　敬白

シカチ・アリャン村を環日本海交流の表章として「環日本海交流センター/エコカルチャーセンター」を設立を

9 月 25 日から 10 月 2 日まで、昨年、国立民族学博物館、新潟県立歴史博物館、横浜ユーラシア文化館で開催した「アムール河の古代美術　少数民族の聖地シカチ・アリャン」展覧会の報告をするために、シカチ・アリャン村を訪問しました。

ハバロフスク空港で、ユーラシアンクラブ理事でもあるサハ共和国のジミートリーさんと合流して、タクシーでシカチアリャン村に向かいました。到着がよるおそかったにもかかわらず、シカチ・アリャン村のニーナ村長、ユーラシアンクラブ会員でもある中等学校教諭のドンカン・ビクトリヤさんと夫の体育教諭ペーチャさんら友人が待っていた。私は早速、昨年の、国立民族学博物館で開催された展覧会のオープニングで会い、ユーラシアンクラブ創設20周年でも旧知の加藤九祚先生が亡くなったことをお知らせし、携帯した九さんの笑顔の写真を机に於いて、黙祷した。

私は今回の訪問で、昨年の展覧会の解説図録を20冊(10キロ)、最後の横浜ユーラシア文化館の展覧会で掲示された大きなポスター、横浜ユーラシア文化館で使用された岩絵の石版模型を使用した拓本作成セットとして、石版、和紙、墨とタンポン、民博、新潟県立歴史博物館、横浜ユーラシア文化館での展覧会の記録ビデオ、写真、新聞に取り上げられた紹介記事、観覧者アンケート結果、記録、などの入ったＣＤ、ＤＶＤ、を説明し、手渡した。その上で、翌日の住民集会では、特にシカチアリャン村を、岩絵、ガーシャ遺跡、村の神話・伝説、暮らしを含めて、ユネスコの世界遺産として登録申請することを目指すことが今後のシカチアリャン村とアムール川流域の先住少数民族の伝統文化の継承と経済発展にとって重要な意味があると思うと話しました。その後、用意していただいた食事をいただき、九さんの遺影にウオッカを添えて、友人たちと懇談した。

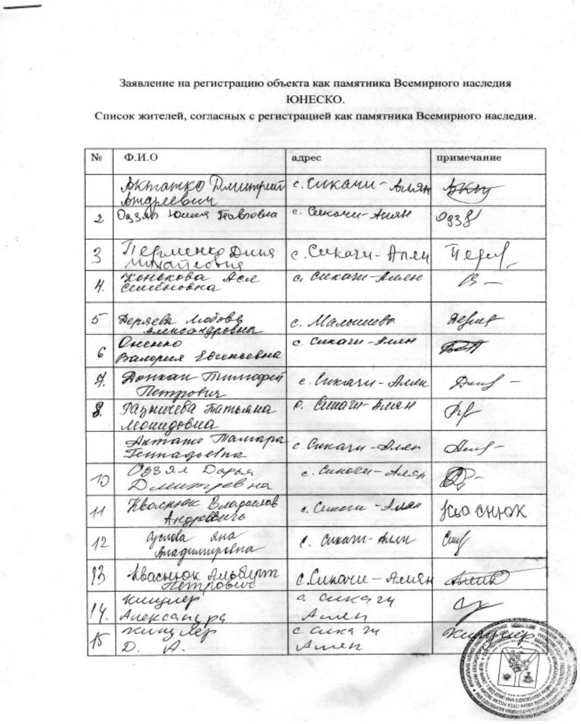
翌日は、午前中に、この間に亡くなった友人のお墓を訪問した。亡くなったセルゲイの奥さんのリューダさんと一緒に、墓地を訪ね、話を聞きながら、それまで私の知らなかった、深く悲しい事情を耳にし、私がこれまで 26 年かかわってきた村の未来の希望のために最後の努力をしたいと決意した。

昨年の展覧会の報告集会は、村の中等学校の教室が用意された。プロジェクターも使用できる教室には、リューダさんも含め、村の住民、学校の教諭、生徒ら 30 人余りが集まった。ちょうどアムール川のサケ漁のシーズンで、男たちだけでなく、奥さんも、徹夜で村中がサケ漁に出かける時期で、男性の姿はなかったが、すでにニーナ村長やドンカン教諭が持ち帰った展覧会の解説図録が、各戸に一冊ほど行きわたっており、300 人の村民が全員知っていると聞いた。私は今回持ってきた解説図録を、手元に欲しい人に改めて渡し、展覧会の様子を写真スライドを使用して報告した。また、ジミートリーさんに翻訳していただいた観覧者アンケートの内容を、ジミートリーさんが読み上げて紹介した。展覧会開催に際して、㈱パスコ環境文化事業部の協力で作成した、岩絵集中地点第 1、第 2 地点を立体復元した動画もシカチアリャン村に提供し、プロジェクター動画で観覧に供した。また岩絵の石版模型を使った拓本作成を見せましたが、その後、学校の授業で子供たちに拓本体験したという連絡がありました。

私は、最後に、解説図録の 3 ページで、提案した「シカチ・アリャン村を世界遺産登録」を申請する住民による賛同署名を呼び掛けた。①古代環日本海交流を象徴するガーシャ遺跡を擁し②ガシャーン集落のある岬の下のアムール河の岸辺にある岩絵群③岩絵誕生を取り込んだナナイの神話、生命樹の世界観を伝えるシカチアリャンのナナイの人の暮らしと文化が一体として世界遺産に指定されることが必要だ、と訴えた。この呼びかけに参加者の反応は敏感で、「すぐにやろう」という声も上がった。

住民集会の後、同行したジミートリーさんと一緒に、岩絵第 1 地点を散歩していると、遠くの方から若者 3 人がやってきて、うち一人が食い入るように私を見つめ「大野さんですか」と声をかけてきた。私もすぐに若者が、ハバロフスク地方政府の文化財保護委員会のラスキンだと気づいた。ラスキンさんは、私が 20 年前に組織した北方ユーラシア学会によるアムール・ウスリー流域岩絵調査にロシア側の若手メンバーとして参加し、のちにナナイの女性と結婚し、以後岩絵の調査を継続し、岩絵がアムール河の水流や氷河の影響で移動していることを跡付ける研究で知られるようになっていた。彼は、私を一緒にいる若者に紹介した。ラスキンさんによると、モスクワの考古学研究所の旧石器部門の責任者エカテリーナ・デェブレット女史の一行 10 人ほどと一緒に岩絵の調査をしているのだという。私は翌日、ドンカン・ビクトリヤ

さん、ジミートリーと一緒に、彼らが宿泊する施設を訪問し、デェブレット女史と懇談した。女史は、私がシカチアリャン村とかかわってきたいきさつやノヴォシビルスク・アカデムゴロドクのデレビャンコ氏と一緒にアルタイ山脈のパジリク王墓を発掘してきたなどの話を聞いた後、シカチアリャンの岩絵の保存についても触れ「岩絵は、アムール川の岸辺の丘の上にすべて移動して保存するのが最適」と自説を述べた。私はすぐに「その考えには賛同できない」と応じ、「岩絵は、シカチアリャン村のナナイの人々にとって、現在でも暮らしに直結した、生きた聖地として存在している。本当は手を触れることもできない、移動することなどできない、信仰の対象になっている。かつて、シカチアリャン村の創世神話にかかわるデョロママと呼ばれる聖地の石が、マリシェヴォ村の堤防工事の際に持ちさられ、堤防の下に沈められ、住民を悲しませたことがある。調査は、村の住民の声に配慮して行われる必要がある」と説明した。この懇談の後、ニーナ村長らと話したところ、「考古学者らは村役場に何の通知もなく調査と称して、岩絵 3 点を抜き取ることをしたり、考古学者らの研究会で“岩絵はナナイの人々とは関係がない”などと報告したりしており、彼らの活動には不満があり、抗議する予定だ」と話していた。私とデェブレット女史との話し合いでも、岩絵を考古学の研究対象としてしか見ず、住民の暮らしと結びついた文化遺産と考えることが希薄だと受け止められた。そうした考古学者も、「岩絵」を世界遺産に登録することを考えていると聞いて、「危険な方向」と注意した。私は、「すでに住民が世界遺産登録申請賛同署名を始めている。それが大事なことだ」と伝えると、「世界遺産の登録には、



Заявление на регистрацию объекта как памятника Всемирного наследия ЮНЕСКО.

Список жителей, согласных с регистрацией как памятника Всемирного наследия.

№	Ф.И.О	адрес	примечание
	Актанко Дмитрий Андреевич	с. Сикачи-Алян	
2	Одзял Юлия Павловна	с. Сикачи-Алян	
3	Перменко Лилия Михайловна	с. Сикачи-Алян	
4.	Жонькова Ася Семёновна	с. Сикачи-Алян	
5	[illegible] Любовь Александровна	с. Малышево	
6	Оненко Валерия Евгеньевна	с. Сикачи-Алян	
7.	Донкан Тимофей Петрович	с. Сикачи-Алян	
8.	[illegible] Татьяна Леонидовна	с. Сикачи-Алян	
	Актанко Тамара Геннадьевна	с. Сикачи-Алян	
10	Одзял Дарья Дмитриевна	с. Сикачи-Алян	
11	Квасюк Владислав Андреевич	с. Сикачи-Алян	Квасюк
12	[illegible] Яна Владимировна	с. Сикачи-Алян	
13	Квасюк Альберт Петрович	с. Сикачи-Алян	
14.	Киндлер Александра	с. Сикачи-Алян	
15	Киндлер Д. А.	с. Сикачи-Алян	

科学的な膨大な文書を用意しなくてはならない。住民の意志だけで決まることなどない。簡単なことではない」と「科学」という言葉を連発し、岩絵と住民の暮らしと文化、神話や伝説など多角的視野から世界遺産に登録するという観点がはなはだ欠けていると思われたが、「シカチアリャン村（岩絵だけでなく）の世界遺産の登録では側面的な協力をお願いする」と依頼して懇談を終了している。

シカチアリャン村の住民による世界遺産登録申請賛同署名は、報告集会の翌日から始まり、私が帰国する前日までに終了。帰国後、14 枚にびっしり記入された 200 数十人の署名用紙がスキャンして送られてきた。

私は帰国後、外務省ロシア交流室を訪ね、シカチアリャン村は、極東先住民族の聖地であるばかりでなく、岩絵の内容には北海道・フゴッペ、手宮洞窟の岩絵にそっくりの人物、船が描かれ、古代の交流の姿をとどめ、またアムール川岸辺の岬にあった村の発掘調査で 13000 年前に遡る、日本の大平山元遺跡出土の土器や長者久保・神子柴型と呼ばれる土器と同年代の土器として、最古の環日本海交流を示すと注目されている。昨年は日本で展覧会も開催し、住民は世界遺産登録申請住民署名を行っている。12 月の安倍・プーチン会談で極東の経済交流と関連する文化事業として「環日本海交流センター・エコカルチャーセンター」設置を話題にしてほしいと提案した。また環日本海交流史の最後に、ロシア・中央アジアと日本をつないだ加藤九祚記念館を日本とロシアを中心に建設することも考慮いただきたいと申し入れています。

私はこのほどのシカチアリャン訪問では、将来エコカルチャーセンターとして整備されることを期待して、村はずれに 1.5 ヘクタールのキャンプを購入し、住民 77 人に分筆して贈与したが、管理が難しく私に返却された用地を所有している。今回の訪問では、ジミートリーさんにハバロフスクで草刈り機を購入してもらい、住民の協力で古い建物を清掃し、ブルドーザーを導入して整地することを計画していた。草刈り機を組み立て、キャンプ地の平坦部の雑草は丸一日かけて刈取り、古い建物のごみの持ち出し、焼却は、村の若者十人の参加で、きれいにし、一部のごみは、大きな穴を掘り埋めました。雑木化した部分は、ブルドーザで整地する予定でしたが、当日になって故障が見つかったり、サケ漁とぶつかって滞在中にはできませんでした。そのため、私の帰国後、ブルドーザによる整地をお願いしました。

私は、このキャンプ地を環日本海交流センター用地として使用するよう外務省に提案しています。

メディア・ユーラシア情報　ネットリサーチ

東京外国語大学「日本語で読む中東メディア」が注目　http://www.tufs.ac.jp/common/prmeis/fs/　です。

【北アジア】

●プーチン露大統領が祝電 「米露関係を危機的状況から引き出したい」2016.11.9 23:16

【モスクワ＝黒川信雄】プーチン露大統領は９日、トランプ氏に祝電を送り、「米露関係を危機的な状況から引き出すために共に行動したい」と表明した。国際情勢における「重大な課題」の解決に向けた協力も呼びかけた。一方でプーチン氏は、両国の対話は「公平と相互尊重の原則」のうえで行われるべきだとも述べ、米国に対し露側の利益を尊重するよう要求した。

トランプ氏の主張はプーチン政権のものと近く、親和性は高い。ただトランプ氏一人で外交方針が決定されるわけではなく、「新冷戦」と称される現在の両国関係は、早期に改善されないとの見方が支配的だ。

露下院のボロジン議長は９日、「新たな米大統領のもと、より建設的な対話が両国間で行われ得ると信じたい」と慎重に語った。

● トランプ氏とロシア大統領が電話会談、関係正常化で一致

【AFP＝時事】(更新)ロシアのウラジーミル・プーチン(Vladimir Putin) 大統領は 14 日夜、米国の次期大統領に選出されたドナルド・トランプ (Donald Trump) 氏と電話会談し、両国関係を正常化する必要があるとの見解で一致した。露大統領府が発表した。トランプ氏の政権移行チームも会談した事実を明らかにした。

大統領府の声明によると、両氏は「現在の露米関係が極めて不満足な状況」にあると認めた上で「関係正常化に向けて共に積極的に取り組んでいくことの必要性」を確認した。また「直接会談に向けて準備をしていく」ことでも合意した。

プーチン大統領はトランプ氏が選挙公約を成功裏に実行していくことを願っていると表明。「対等で、互いに尊重し、相手国の内政問題に干渉しないことを原則に、米国の新政権との間でパートナーとしての対話を行っていく」用意があると述べたという。

プーチン大統領とトランプ氏は「最大の敵である国際的なテロリズムおよび過激派との闘いに団結して取り組む必要がある」との認識も共有。これに関連して「シリア危機を解決するための問題」についても協議した。

一方、トランプ氏の政権移行チームは声明で、プーチン大統領の方から電話があり、「歴史的な選挙での勝利に対する祝意」を伝えられたと説明。会談では両国が直面する「脅威と課題」や経済問題、「200 年余りに及ぶ歴史的な米露関係」について話し合ったとしている。

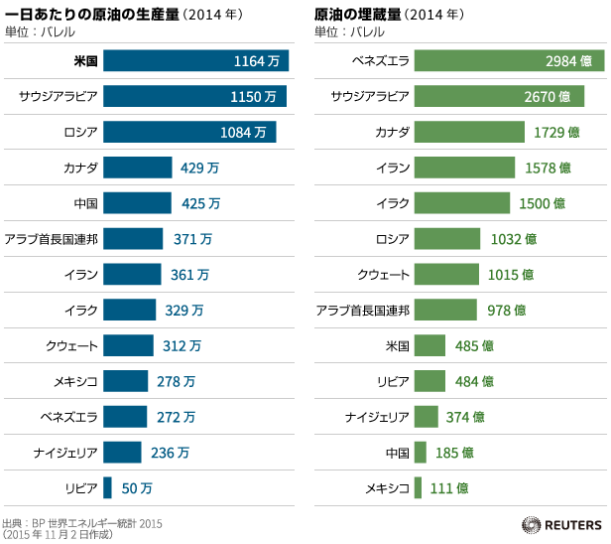
米大統領選中、プーチン大統領はトランプ氏を暗に支持し、トランプ氏もプーチン大統領をたびたび持ち上げ、一緒に仕事をしたいとの意向も示していた。【翻訳編集】AFPBB News

[西アジア]

● ＯＰＥＣの苦闘

石油輸出国機構（ＯＰＥＣ）加盟国は９月２６―２８日、アルジェリアで開催された非公式会合で、２００８年以来初めて石油生産量を減らすことで合意した

原油の生産量と埋蔵量の多い国



● ロシア軍機がイラン基地使用、シリア空爆で初 IS 拠点など攻撃　2016 年 08 月 17 日 14:15 JST

［モスクワ　１６日　ロイター］ - ロシア軍の爆撃機が１６日、イラン西部ハマダンのイラン軍基地を飛び立ち、シリア国内の過激派の拠点を空爆した。シリア空爆作戦でロシア軍がイランの基地を使用するのは初めてだという。

ロシア国防省によると、戦略爆撃機Ｔｕ―２２Ｍ３とＳｕ―３４が北部アレッポ県、北西部イドリブ県、東部デリゾール県で過激派組織「イスラム国」（ＩＳ）や「ヌスラ戦線」の拠点を攻撃した。

シリア内戦では、ロシアはイランと共にアサド政権を軍事支援しているが、ロシアが昨年９月に開始した空爆作戦で自国とシリア以外の空軍基地を使用するのはこれが初めて。

昨年、核開発の大幅な縮小を約束したイランに対して欧米などが経済制裁を解除して以降、ロシアもイランとの関係を改善し、軍事面でも協力を進めている。

● ロシア経済相、収賄容疑で拘束　バシネフチ株絡みで 2016 年 11 月 15 日 11:34 JST

［モスクワ　１５日　ロイター］ - ロシア連邦捜査委員会は１５日、２００万ドルの賄賂を受け取った疑いでウリュカエフ経済発展相の身柄を拘束したことを明らかにした。

国営の石油最大手ロスネフチ(ROSN.MM)が中堅石油会社バシネフチ(BANE.MM)の株式を取得した件に絡み、「肯定的に」評価した疑いが持たれている。委員会は同相を近く訴追する見通しとしている。

連邦捜査委員会は大統領直属の組織。委員会の関係者はロイターに対し「尋問後、直ちに身柄を拘束した」と話した。ペスコフ大統領報道官はタス通信に対し「これは深刻なことだ」と述べ、「いずれにしても判断できるのは裁判所だけだ」とした。

ロスネフチは１０月、およそ３３００億ルーブル（５０億ドル）でバシネフチの株式約５０％を取得した。

【中央アジア】

● 「指導者は被爆地訪問を」カザフ大統領が国会演説

2016.11.8 23:15

核軍縮・不拡散に力を注ぐカザフスタンのナザルバエフ大統領は８日、参院本会議場で演説し、世界各国の指導者に戦争被爆地の広島や長崎を訪問するよう訴えた。自身が９日に広島を訪れることに触れ「犠牲者に祈りをささげ、広島から核兵器廃絶を呼び掛ける」と述べた。

カザフスタンはソ連時代に４５６回の核実験が行われ１００万人以上が被曝（ひばく）した。ナザルバエフ氏は衆参両院議員を前に「両国の国民が体験した共通の困難と悲劇的な運命が私たちを結びつけている」と語り、核兵器のない世界に向け日本と連携する考えを示した。

カザフスタンが来年から国連安全保障理事会の非常任理事国となることにも言及。「来年は日本と非常任理事国の任期が重なる。両国の協力にさらなる可能性が開ける」と語った。日本の安保理常任理事国入りへの支持も表明した。

【南アジア】

● 「イスラム国」も犯行声明、パキスタン病院爆発

2016.8.9 09:58

【バンコク＝岩田智雄】パキスタン南西部クエッタの病院で多数の弁護士を含む７０人が殺害された自爆テロで、イスラム教スンニ派過激組織「イスラム国」（ＩＳ）系の通信社が８日、ＩＳの犯行声明を伝えた。このテロでは、国内のイスラム武装勢力「パキスタンのタリバン運動」（ＴＴＰ）の一派「ジャマトゥル・アフラル」も犯行を認めており、このグループは以前、ＩＳに忠誠を誓っていた。

● パキスタンの聖廟で爆発、52人死亡 ISが犯行声明

パキスタン南西部バルチスタン州にあるイスラム教の聖廟で１２日、爆発があり、州政府によると、女性や子どもを含む市民少なくとも５２人が死亡、１００人以上が負傷した。ロイター通信によると、過激派組織「イスラム国」（ＩＳ）が系列ニュースサイトを通じ犯行を認める声明を出した。

地元行政当局によると、１０代の少年が参拝客らに紛れ込んで自爆したという。ＩＳはこれまでも州都クエッタでのテロで犯行を主張しており、事実であればパキスタンでも影響力を増している形だ。

地元英字紙ドーン電子版によると、聖廟では踊りや楽器演奏などのイベントが開かれていた。イスラム過激派は死者を祭る聖廟やその参拝客を異端と見なし、攻撃の対象としている。

現場は南部カラチから約１００キロ北の山間部。

クエッタでは１０月、警察施設が襲撃され約６０人が死亡。８月には病院での自爆テロで少なくとも弁護士ら７０人が死亡した。いずれもＩＳが犯行を認めた。（共同）

[東南アジア]

●フィリピン大統領、ＩＳが入国したら「人権忘れる」

2016 年 11 月 15 日 13:58

［マニラ　１４日　ロイター］- フィリピンのドゥテルテ大統領は１４日、シリアやイラクを追われた過激派組織「イスラム国」（ＩＳ）の戦闘員らがフィリピンに入国し活動拠点を築くこともあり得るとした上で、そうなった場合、人権に関する義務を放棄して国民の安全を守ると述べた。

ドゥテルテ氏は、フィリピン南部のミンダナオ島はすでに武装勢力や強盗の温床となっていると語り、「迫り来るテロ」に懸念を表明。こうした不安定さを利用して過激派が流入する恐れもあるという。

警察当局での演説で同氏は「支配地を奪われた中東のテロリストらが、ここに来た場合に備えて準備をしなくてはならない」とした上で、「彼らには人権などみじんもない。私は、人権のために国民が殺されるのを許さない。そんなものはたわごとだ」と述べた。

人権は、ドゥテルテ氏にとって厄介な問題。麻薬犯罪者の取り締まりを人権侵害として批判する活動家や西側諸国に対し、同氏は連日怒りを爆発させている。

● 「単に島を奪うだけではない」ベトナム高官、激化する中国の横暴　「日本が地域内のバランスを」

2016.11.13 13:50

【緊迫・南シナ海】

中国の暴力的覇権拡大で、東アジアに緊張が走っている。南シナ海などで領土・領海を奪われてきたベトナムの政府高官らが「今そこにある危機」を訴えるためにこのほど来日した。事態の深刻化・緊迫化を憂い、日本が東南アジアの国々と協力して、地域の安定化に動くことを期待した。（夕刊フジ）

「われわれは１０００年にわたって、中国の横暴に苦しめられてきた」

ベトナム外務省顧問局長のティン・ホァン・タン氏は、こう語った。

越中両国は近年だけでも、１９７４年にパラセル（中国名・西沙）諸島の領有権をめぐって武力衝突し、８８年にはスプラ

トリー（同・南沙）諸島のジョンソン南（同・赤瓜）礁に中国が侵攻した。

現在、中国がいずれも実効支配し、軍事基地化を進めている。

ティン氏は「中国の目的は単に島を奪うだけではない」といい、続けた。

「中国は南シナ海を支配して『海の道路』をつくり、太平洋に自由に出ていこうとしている。今後、中国と米国は東アジアの主導権をめぐって衝突するだろう。どちらが主導権を握るかは、今後１０～１５年で決まる。日本は中国のリスクにいち早く気付き、安倍晋三政権は『自衛のための政策決定』をしてきた。米国の同盟国である日本が、東アジアの国々とパートナーシップを結び、地域内のバランスを取ってもらいたい」

[東アジア]

● **尖閣周辺に中国船４隻　４日連続** 2016.11.14 12:02

尖閣諸島（沖縄県石垣市）周辺の領海外側にある接続水域で１４日、中国海警局の船４隻が航行しているのを海上保安庁の巡視船が確認した。尖閣周辺で中国当局の船が確認されるのは１１日から４日連続。

第１１管区海上保安本部（那覇）によると、４隻は海警２１０１、海警２４０１、海警２５０２、機関砲のようなものを搭載した海警３５１１５。領海に近づかないよう巡視船が警告した。

【ＴＰＰ】

● **ＴＰＰ、米抜き発効目指す動き　トランプ次期大統領に対応、リマＡＰＥＣで協議も** 2016.11.14 22:11

【シンガポール＝吉村英輝】米大統領選でドナルド・トランプ氏が勝利し、見通しが厳しくなった環太平洋戦略的経済連携協定（ＴＰＰ）について、米国抜きの発効を目指す動きが出てきた。中国を加えるべきとの声も出ており、日米による通商・安全保障面などでの“中国包囲網”が崩れる可能性もある。参加国首脳は、１９日からペルーの首都リマで始まるアジア太平洋経済協力会議（ＡＰＥＣ）首脳会議に合わせ、対応を協議する。

メキシコのグアハルド経済相は１０日、トランプ氏が掲げる北米自由貿易協定（ＮＡＦＴＡ）見直しに懸念を表明。さらに、ＴＰＰが頓挫するならば、発効に米国の批准が事実上必要となる現在の条項について、「各国と変更を協議する必要がある」と語った。

また、ＴＰＰ参加１２カ国中、日本も含めメキシコやニュージーランド、オーストラリア、シンガポール、ベトナム、マレーシアの７カ国が年内に協定を批准するとの見通しも示した。

一方、ペルーのクチンスキ大統領も１１日、「米国抜きの（ＴＰＰに）似通った協定に置き換えることもできる」とし、中露２カ国も含まれるべきだと語った。

オーストラリアのビショップ外相は、各国は米新政権にＴＰＰ批准を働きかけるべきだと説く一方、ＴＰＰが発効しなければ、「生じた空白は（日中韓印など１６カ国が交渉中の）東アジア地域包括的経済連携（ＲＣＥＰ）で埋められることになる」と述べ、地域の通商体制再編で、米国外しの流れが強まると牽制した。

ＴＰＰは関税削減だけでなく、知的財産保護や政府調達などの公正なルールも定めた次元の高い協定。専門家は「経済関係強化と自国の効率性や生産性向上に向け、１１カ国はまず米国抜きで再交渉し、ＴＰＰを暫定発効してもいいかもしれない」と指摘している。

【ドゥテルテ・トランプ】

● **焦点：トランプ新政権と敵対か、メルケル独首相に最大の試練** 2016 年 11 月 15 日 13:53 JST

１１月１４日、米大統領選でのトランプ氏勝利は世界中の米同盟国に衝撃を与えたが、中でも最大の痛撃を感じているのはドイツだろう。写真はメルケル独首相。ベルリンで撮影（２０１６年　ロイター/Axel Schmidt）

・・・(略)

南ドイツ新聞は先週、トランプ氏がジャケットをはだけ、胸に描かれた「私はベルリン市民ではない」というメッセージを見せる風刺画を掲載した。

しかし、そんなことでメルケル首相はたじろがないだろう。首相は小さな一歩を大切にする冷静な現実主義者であり、ロシアのプーチン大統領、トルコのエルドアン大統領といった剛腕政治家と対話を積み重ねてきた。

それでも、トランプ氏が大統領選で勝利した後にメルケル首相が発表した声明は強烈だった。協力に条件を付ける内容で、民主的に選ばれた指導者に対して同盟国から挑発的なメッセージを送った格好だ。

「ドイツと米国は、民主主義、自由、法の尊重、人間の尊厳といった価値観で結ばれている。これは出自、肌の色、宗教、性別、性的志向、政治観を問わない。米国の次期大統領に対し、これらの価値観に基づいて緊密な協力を申し出る」と首相は述べた。

メルケル首相の大きな外交実績の１つに、ＥＵ２８カ国をまとめ上げ、ウクライナ東部に侵攻したロシアに制裁を課したことが挙げられる。

トランプ氏が公約通り、プーチン氏と緊密な関係を結ぶなら、米欧、そして欧州の対ロシア前線は崩壊し、首相の対プーチン政策が水泡に帰すだろう。・・・(略)

◎　アジアンレポート拡充のためボランティアスタッフを募集します。お問い合わせください。

◎　ニュースレターへの感想をお願いします。

◎　レター掲載原稿を募集します。

【愛川町雑感】

10 年前にグランドデザインをまとめこの町で活動するようになっていくつもの事件に遭遇した。元教育長による暴言、音楽祭への干渉、まちづくり団体の剽窃、しがらみ町長選挙、観光協会入会拒否、議会だよりからの「町民の声」削除、半原偏重・コンサル任せのまちづくり、最後の町づくりは現在進行形である。多くの人材、多彩なまちづくりの活動がこの町の財産だが、役場や議会は、古いしがらみの上に載っているだけ。この町は変わらないといけない。そして変わりつつある。このように見ている人がたくさんいることも知っている。何とかなるだろう。

【まちづくり講座　第 1 回、第 2 回開催】

この町に移り住んで、或る日、「アジアの眼」が降臨した。人類史に深いかかわりを持つ「地下水脈」の物語。水源の町、水の郷にふさわしい歴史的背景について、話している。日本でこんな話をする人は珍しいと思う。アルタイ山脈から天山山脈、そしてアムダリヤへと、加藤九祚先生の後背を拝して生きてきたことでたどり着いた境地。いずれ本にしたいと思っている。後述するようなサハとの交流やシカチアリャンに「環日本海交流センター設置」すること、加藤九祚先生を顕彰する活動、日本橋プロジェクト、の合間を見て作業するしかない。畑や水田、カレー作りの合間の作業となるが、合間は、朝 2 時から 6 時の間となる。しがらみにみちたまちづくりは、気長にやるしかない。

【外務省欧州局長に面会】

先日、私の年来の知人の紹介で、江藤セデカ理事長と一緒に外務省の林肇欧州局長を訪問した。12 月 15 日に山口県で、安倍首相とプーチン露大統領が懇談するのに合わせ、日本とロシアが協力して、シカチアリャンに「オクラドニコフ・加藤九祚記念　環日本海交流センター・エコカルチャーセンター設置」を議題とするようにと提案した。林局長は、極東経済開発と北方領土で手いっぱいのようであたが、私は、「こうした時こそ、文化の話題、人類史的話題が有益である」と説明した。林局長は「プロモーターが現れればサポートする」と応じた。

【国際交流基金に、第 8 回愛川町音楽祭―笛と太鼓のフェスティバルをサハ共和国、ハバロフスク、シカチアリャンで開催する助成申請】

NPO ユーラシアンクラブ･愛川サライは､2010 年から続けている愛川町音楽祭―笛と太鼓のフェスティバルを来年 7 月 23 日から 8 月 1 日まで、サハ共和国の首都ヤクーツク（27 日)、ハバロフスク市（29 日)、シカチ・アリャン村(31 日)で開催する計画をまとめ、国際交流基金に申請した。

計画について、サハ共和国文化省、シカチ・アリャン村から招聘状が届き、近くハバロフスク地方政府文化局からも招聘状が届く予定で、愛川町からは、音楽祭の常連となったプロのミュージシャン 4 人、愛川高校校長を初め和太鼓部顧問 2 名、和太鼓部員 9 人、和太鼓部卒業生で創設した和太鼓ユニット「打縁」のメンバー6 人、に、サハ共和国の青少年太鼓集団テティム受け入れ実行委員会から諏訪部勲実行委員長ら 2 人、計画の企画製作者として大野遼と江藤セデカ理事長が同行、計 27 人が派遣される。

ヤクーツクでは、ハトラエフ夫妻を初めテティムの若者 40 人と合同演奏会を開催するほか、ハバロフスク、シカチ・アリャン村にも、テティムの若者が同行し、特にハバロフスク市やシカチ・アリャン村では、アムール流域の先住少数民族の芸能団と交流する計画となっている。

ユーラシアンクラブ創設に当たっては、大野遼が 1991 年に初めてシカチ・アリャン村を訪問し、1991 年ハバロフスク地方政府庁舎で開催したセミナーでユーラシアンクラブを創設を提案し、1993 年 2 月 10 日、九段会館で開催したシンポジウムに、シカチアリャン村のジャンナ・ミハハイロヴナ村長（当時、故人）やドンカン・ビクトリヤ教諭ら極東の少数民族 14 人を招聘し、創設を決定した経緯から、今回の計画が認められれば、一つの節目となる。上記した、「環日本海交流センター」が誕生し、シカチアリャンが世界遺産に登録されれば、大野遼の目的はかなえられることになる。国際交流基金の決定を期待したい。

人類史は、太陽と水を、国家イデオロギー（宗教）に取り込みながら、資源と人を囲い込む国家を形成し、自然破壊を続ける時を経て、国家民族宗教の枠組みが危機的な緊張状態を迎える時代に入っている。地球を覆う水は、人を含め、すべての生命を育む、奇跡的な存在である地球の象徴であるが、水の中には、太陽も人類を育んだ種（精液）もあると考えられ、人類社会を荘厳する音楽も表象されてきた。その音楽の原点が笛と太鼓である、というのが、アジア・シルクロード音楽祭を組織し活動してきた私の結論である。最後の形として、限りなく少数民族に敬意を表し、国家民族宗教を超えた理解親睦協力を模索するコンサートツアーを、ユーラシアンクラブ創設の原点となったシカチアリャン、ハバロフスク､そして太鼓を絆とした交流の地サハ共和国で音楽祭を開催し､アムール流域先住少数民族との交流ができそうな今を噛みしめている。

発行：特定非営利活動法人ユーラシアンクラブ　発行人：江藤セデカ
住所：〒103-0022 東京都中央区日本橋室町 1-11-5 TEL：03-5376-9343
支部愛川サライ〒243-0303 神奈川県愛甲郡愛川町中津 6314―1
TEL：046-285-4895 FAX：046-265-0167 E-MAIL：paf02266@nifty.ne.jp
郵便振替：00190-7-87777 ユーラシアンクラブ　お振込の場合：ゆうちょ銀行〇一九店　当座預金　0087777　ユーラシアンクラブ　会費、ご寄付はこちらへ。会費は正会員年間 1 口 3,000 円、学生会員 1,000 円、賛同会員 2,000 円。一口以上のご協力をお願い申し上げます。
http://eurasianclub.org/
2016 1201　Non Profit Organization Eurasian Club　12

編集後記：40 年間私淑させていただいた加藤九祚先生が逝かれた。電話口で響く「やー」という九さんの声が聞こえる。アルタイ山脈を歩いている時、教えられた笑顔の大切さ、ジプシーの丘でジプシー一家を二人で訪ねたことも思い出す。九さんのそばで北方ユーラシア学会の事業、国家プロジェクト、音楽のシルクロードなどさまざまなユーラシアンクラブの活動をプロデュースできたことはありがたいことだった。まだやり残していることがある。それにめどが立ったら、追っ付けていきます。また一杯やりましょう。私が愛川町で 2 回開催したまちづくり講座で、私自身が見えるものがある。太陽と水で誕生した国家民族宗教そして自然破壊の歴史（お）